©日本カムリ学会2007
Cylchlythyr 11:12-15

研究紹介 *Rhif* 10

Pilch, Herbert. 1984. "Structure of Welsh Tonality". *Studia Celtica* XVIII:234-252.

Thomas, Ceinwen H. 1967. "Welsh Tonality—A Preliminary Study". *Studia Celtica* II: 8-28.

音調とは、発話の調子のことで、例えば、疑問文や不確実な内容の発話の語尾において音調は上昇傾向にある、ということが出来ます。音調は、発話の中で目立ち(prominence)を置きたいところで上昇するなどして先行する音調と声の大きさや高さを変化させることによって表現されるため、音調変化は目立ちを持っている音節を頂点として引き起こされます。つまり、１つの発話の中でいくつか音調の変化はみられるものです。では音調の研究とはそうした変化の様子を逐一記述していくことかといえば違います。「こうしたケースでは、こういった特徴が見られる」と変化の傾向を見つけることによって、はじめて対象

©日本カムリ学会2007
Cylchlythyr 11:12-15

言語の音調特徴をつかむことが出来るのです。ここで、Pilch (1984), Thomas (1967) の研究における、音調特徴を捉える試みを紹介していきます。

Pilch (1984) はまず音を捉える概念というものについて考察しています。誰もが英語はアルファベットの子音と母音とで書かれていると知っており、訓練をうければ発話からその字体を書き起こすことが出来ます。しかし、だれも子音・母音を逐一聞き取っているわけではないのです。「英語には子音と母音があり、発話はそれらの音素により構成されている」という前提があるために、ひとはそれに則って発話を区切り、単語にして、文法力も使って書き起こすことができます。例えば /a/ という音素を考えます。この母音を実際に発音したものを音声学的に観察すれば一つとして全く同じということはあり得ないのですが、それらは、一つの音が異なる形（異音）で何度も繰り返し現れていると判断されているのです。繰り返し出現する現象に名前をつけ、そしてそれが多くの人によっても違いを聞き取ることができるという実証を通じて、分析は可能となるのです。これが音を捉える際の共有の概念です。このように、音声分析を行う際には繰り返し起こり、他とは分類可能な現象について名前をつけ、それを用いて分析を進めていく手法が必要となります。Pilch (1984) はウェールズ語の音声を聞き、繰り返し出現するピッチ変動の傾向を 6 つの記号（以下参照）を用いて表現しました。

	continuous	broken
rise	⌐	⌐
level	¬	¬
fall	⌙	⌙

上昇といっても、声の高さ（ピッチ、pitch）の違い方、つまり最も低い声から高い声までの急激な上昇か、中程度の声の高さから最高までのややゆるやかな上昇かといった区別の必要性も指摘しています。しかし、結論として「この発話（例えば断定的なものの言い方をする）では、こういう傾向がみられる」という指摘が出来ず、あらゆる発話は発話されたコンテクスト（背景の状況）の情報が必要であると述べています。つまり、繰り返しみられる音調変化の基本的な 6 つの動きは捉えることができたものの、それがあらわれるか否かは発話の状況によるという結論にいたったのです。というのも、ウェールズ語の発話では音調の位置ですら発話によって決められるため、コンテクストなしに音調の形状や程度について予測することが出来ないのです。その理由については次の章で言及します。

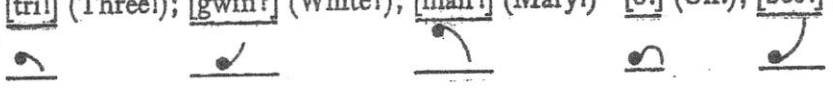
音調は文章の目立ちのある音節にみられるという言及をしましたが、この目立ちのある音節について考察しています。目立ちのある音節には、その音節に

©日本カムリ学会2007
Cylchlythyr 11:12-15

ピッチが高い・持続時間が長い・ふり幅が大きいといった傾向が見られるといわれ、英語では強勢（stress）を持つ音節のことであるとされています。英語の単語はそれ自体に強勢や副強勢を持っていて、例えば、Christ・mas ならば、前の音節に強勢があります。ある語彙が発話の中で強勢（目立ち）を持った場合、その音節において音調の変化が起こり、発話のながれに影響するのですが、Pilch (1984) によるとウェールズ語はそうではありません。単語自体に強勢はあるものの、それは発話の中では持続されず目立ちのある音節は発話のなかで変化するというのです。例として wirioneddol (adj) 「真実の」は４つの強勢パターンがあることを述べています。これが前の章でふれた音調の捉えにくさの理由です。そして、これは Cambrian English（ウェールズ人の話す英語）でもみられる現象であり、英語を話しているにもかかわらず、強勢の位置が一定ではないと指摘しています。こうした現象の理由として気音化（aspiration）による子音の長化も挙げられていますが、いずれにせよ音調の傾向をつかむ、例えば英語で言えば、「平叙文の音調は強勢のある音節である程度上昇し、基本的には発話のスタートから下降の一途をたどる。」というような指摘は難しい、と結ばれています。

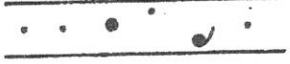
さて、Thomas (1967) では Taff valley の Nantgrarw 地方出身の被験者の協力を得て、sense group（意味まとまり）1における音調の変化の研究を行っています。それには下のような音調記号を用います。

[tri!] (Three!); [gwɪn?] (White?); [mair!] (Mary!) [o!] (Oh!); [beθ!] (What!)



これを、上昇下降の程度によって６つに下位分類し、さらに２つのパターン（上と下の等位：level）を加えた８つの分類をして、発話の分析を行います。また、意味まとまりには一つの核となる音節 (nucleus) と、それに先行する prehead・head (この音節も prominence を持つ)、後続する tail と呼ぶ音節によって構成されているとします。また特に核において現れる音調を simple tune とします。この記号を用いることで、発話の上下の流れが可視的に表現され、発話の再生が可能になっています。

[ix xin ˊsəmɪd ˏoð ma?] (Are you moving away from here?)



[1] 休止(pause)によって分断された、１つもしくはいくつかの単語の集合。

©日本カムリ学会2007
Cylchlythyr 11:12-15

さて、Thomas は続いて意味まとまりの中に simple tune が複数表れる現象に触れ、その名称及び出現の様子について言及していますが、何より興味深いのは意味まとまりにおいて音調の変化が見られたとき、後続する音節の音調は先行する音調の形状によって影響を受けるという指摘です。つまり、Thomas も音節における音調の様子はそれ自体というよりも発話の流れに影響されると指摘しているのです。Thomas は８つの音調の形状がどういったコンテクストでみられるのかというような分類は行わず、８つの基本単位がどういった状況でみられるのか実際の発話を例にとって指摘するにとどめています。

２つの論文の中で、ウェールズ語の音調をとらえる試みとともに、ウェールズ語の音調を捉えるでも何か現象の特徴を記述する際には、繰り返し起こる事象を捉えてその繰り返しの状況を捉えるという姿勢が基本であるという指摘がなされています。

（編集付記）Thomas (1967) はすでに「研究紹介」Rhif 3（*Cylchlythyr* Rhif 8: 10-12）において紹介されていますが、ここでは Pilch (1984) の研究との共通点の指摘をするために敢えて再度紹介します。音調の研究する上で「繰り返し現れるパターン」を見出すことの重要性を指摘し、Pilch の場合は６つのパターンのピッチ変動、Thomas の場合には、核 (nucleus) を中心に持つ意味まとまり（sense group）であると指摘しています。（編集担当幹事）